

## B 特別支援学校（視覚障害）

### （1）学校の概要

B 特別支援学校（視覚障害）は、開校初年度は小学部のみで児童生徒数は 40 名弱であった。その後、中学部、幼稚部が設置され、現在に至っている。

平成 27 年度現在の幼児児童生徒数は 40 名強となっている。このうち、重度・重複学級に在籍しているのは全体の約 33%を占めている。

教育課程上の類型は、いわゆる準ずる教育課程と知的障害特別支援学校代替の教育課程の 2 類型となっている。

特徴的な取組としては、早期支援の重要性を鑑み、0 歳からの親子育児支援や早期教育相談を随時実施している。

また、遠方により通学が困難な児童生徒のために寄宿舎が併設されている。

地域の小中学校との交流及び共同学習に関しては、近隣の小学校と中学校との日常的な交流活動を継続して実施している。地域社会との結びつきに関しては、寄宿舎祭りを実施したり、道徳の公開授業や学校公開を実施したりする等、地域住民との交流活動が積極的に行われている。

### （2）ICT の活用状況

従前より自立活動等においてコンピュータの指導等が積極的に行われてきている。また、コンピュータの操作に関して、重複障害のある児童生徒用のキーボードガイド、点字使用の児童生徒用のアプリケーション操作用の補助教材（点図）等を作成するなど、一人一人の障害の状態と特性等に合わせた手作り教材も充実している。

また、ICT の活用を積極的に進めているキーパーソンとなる教員が校内研修を行うことによって、一人一人の教員の意識も高い。ICT に限らず校内研修に関しては OJT（On-the-Job Training）の手法を取り入れ、日常的に視覚障害教育の専門性を維持、向上させようとする組織と体制が整っている。

iPad は導入されて間もないこともあり、まだ積極的に活用している状況とはなっていないが、「情報グループ」と呼ばれる校内組織が ICT 活用の推進役となっており、外部講師を招いての研修会なども実施している。

通信環境に関して、校内 LAN が設置されており Wi-Fi アクセスポイントによるタブレット端末（Windows）のインターネット接続が可能となっているが、Wi-Fi アクセスポイントの台数が限られていること、また、iPad の接続は認められていないことから、今後はインターネットによる検索ができないなどの問題が顕在化することが予想される。

### （3）事例

当該事例は中学部の自立活動の時間において、点字使用生徒（全盲）が感覚代行機器であるスクリーンリーダー（PC-TALKER）と、検索ソフトウェア（サーチエイド）を用いる事によって、普通文字の文書作成を行うという取組であった。

文書作成に当たっては、その前提となるコンピュータの操作技術が不可欠であるが、この実践事例の優れている点は、文書作成、文書保存等の操作にあたり、コンピュータ画面の構成とその操作方法について、自作の触図を用いて事前学習していることである。これにより、音声フィードバックされた情報を正確に判断して、瞬時に次の操作を行うことが可能となっていた。

また、文書中に含める内容について検索ソフトウェアを用いて調べ、そこから適切に必要な情報を選択し、文章化していた。

点字使用の児童生徒が普通文字の文書作成を行う場合は、点字タイプライターと同様に6つのキーを用いる場合とフルキーによるローマ字入力が想定されるが、本生徒はフルキーによる正確なタッチタイピングの技能を身につけていた。スレート型の携帯端末の流行により、ともすればタッチタイピングの技能の習得が等閑になりがちである。

本事例においては、適切な触図教材を用いた事前学習によるワープロソフトの仕組みの理解、タッチタイピングを含めたコンピュータの基本的な操作技術、当該生徒の学習への積極的な姿勢等が相まって、大きな成果をもたらしたと考える。

#### (4) 特徴的な点に関するまとめ

今回の事例では、当該の点字使用の生徒がスクリーンリーダー等を適切に活用し、目的的に普通文字の文書作成を行っていた。

点字使用生徒がワープロにより普通文字の文書を作成するためには、①タッチタイプによる正確なキー入力、②音声ガイドによる適切な漢字選択（のための漢字・漢語に関する知識）③確した文書のファイル管理、④検索ソフトの操作等の一連の技能を身につけていなければならない。

これらについて、事前に段階的な指導が適切に行われていることにより、非常にスムーズ、かつ正確に、プリントアウトを含めた文書作成が行われていた。

特に、ワープロの文書管理については、画面表示情報を点図化することにより当該生徒が文書の保存やフォルダの指定等のファイル管理に関して、適切なイメージを持つことができ、そのことがよりスムーズなコンピュータの操作へと繋がっていると考えられる。

キーボードによる入力等のコンピュータの基本的な操作は、今後、改めてその重要性が認識されると想定されることから、本事例が極めて有意義な取組であると考えられる。

(田中良広・土井幸輝)

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究—学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理—」（平成 28 年 3 月），71-72 に記載された内容である。